

# 教養研究センター 身体知の実験授業

代表者 横山千晶（教養研究センター所長 法学部）

## ■趣旨

教養研究センターの基盤となる研究のひとつが「身体知プロジェクト」です。どうしても言語表現中心となる大学の知の世界に、「体験」を積極的に盛り込むことで、言語表現そのものをより深化し、体得された能力として身に落としていく作業は、教育の世界でいかように可能となるのか。このプロジェクトではさまざまな形で教育・科学・アートの世界で展開される「身体知」のあり方を探求し、それぞれの理論をつぶさに見ていく過程で、私たちが目指す新たな「知」としての身体との向き合い方を模索しています。独自の理論構築の過程で展開されるひとつが、理論を実際にためにしてみる場としての実験授業です。これらの実験授業では毎回参加者が自分の経験を振り返るとともに、ポートフォリオを作成したり、授業後のアンケート調査を行うことによって教育効果を計り、参加者の発見と気づきを見出すことによって、カリキュラム・モデルを徐々に構築していくことを目指しています。

## ■内容

### 1. 「体をひらく・心をひらく」

2006年度から始まった秋学期集中の実験授業では、さまざまな身体スキルや表現ツールを用いて（瞑想、呼吸法、絵画、詩歌、ダンス、造詣美術）他者と自分の新たな側面に気づき、それを積極的に言語化していくことを主眼としています。4年目を迎える2009年度は「体をひらく、言葉をひらく—私たちの物語を紡ごう」のタイトルで、対自・対他のワークショップを経た後で、グループによる物語の作成を行い、パフォーマンスへと結びつけました。



「体をひらく、言葉をひらく—私たちの物語を紡ごう」より

### 2. 新しい文学教育

2007年度から始まった夏季集中の実験授業「新しい文学教育」は3年目を向かえ、2009年度は南アフリカ出身のノーベル文学賞作家、J. M. クッツェーの『恥辱』と『動物のいのち』に焦点を当て、「動物とは何か？」という根源的な問いについて参加者同士で考察を深めました。今回も演出家、モダンダンサー、パントマイマー、狂言師などの多彩な表現者を特別講師としてお迎えし、慶應義塾大学で教鞭をとる新進気鋭の研究者と協力し合いながら、動き回りながら考えていく能動的な授業を展開しました。参加者にはクラスごとにポートフォリオをつけてもらい、自分の学びと発見の過程を見つめてもらいました。

## ■これからの課題

4年にわたる実験授業のデータをもとにして、身体を通した言語力の育成の成果が認められ、「身体知」は2010年度から正規科目化されます。しかし、教育はそれが正規科目となろうとそうでなかろうと、すべてひとつの実験の過程です。あらゆる知は身体を通して語られ、伝達される。もう一度この点を確認しつつ、より多くの教員や研究者を巻き込んだ意見交換と研究を続け、さらに幅広いカリキュラム・モデルの構築を目指していくことが私たちの目指すところです。